

| | | | |
|-------------|---|------|---------|
| 氏 名(本 籍) | 伊 藤 晋 二 (愛 知 県) | | |
| 学 位 の 種 類 | 博 士 (医 学) | | |
| 学 位 記 番 号 | 博 甲 第 1,946 号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成10年 3 月 23 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | |
| 審 査 研 究 科 | 医 学 研 究 科 | | |
| 学 位 論 文 題 目 | 司法精神鑑定例における供述分析と心理テストを指標とした供述の信頼性の検討の試み | | |
| 主 査 | 筑波大学教授 | 医学博士 | 村 上 正 孝 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 医学博士 | 三 澤 章 吾 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 薬学博士 | 下 條 信 弘 |
| 副 査 | 筑波大学教授 | 医学博士 | 小 林 廉 毅 |
| 副 査 | 筑波大学助教授 | 医学博士 | 戸 村 成 男 |

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

司法精神鑑定において、被鑑定人による精神症状の創出、すなわち詐病を検出することは、正しい診断と責任能力の判定に不可欠である。これまでの供述分析を中心とした供述心理学と、心理テストを用いた研究は、供述あるいは心理テストのどちらかに焦点を合わせたものであり、精神鑑定の実務に寄与する客観的な評価方法を提唱しているものは数少なかった。

そこで本研究では、司法精神鑑定における被鑑定人の供述の信憑性について、言語学的供述心理学の方法と、心理テストによる所見を併用して検討し、とりわけ精神鑑定時における詐病の有無の鑑別に寄与する客観的方法を開発することを目的とした。

(方法・対象)

1. 41例の精神鑑定例について、Griceの質の基準を真偽の指標として用いて、①事実と異なる供述をする、②供述が変遷する、という2項目のいずれかに1回でも抵触する発話がなされたならば、その被鑑定人は虚言をなしていると定義し、このような被鑑定人をB群とした。一方、上記2項目に抵触する発話を全くなさない被鑑定人をA群とした。次に、鑑定人が実際の精神鑑定の場面において着目するGriceの量・関連・様態の基準に該当する発話の特徴を挙げ、A群とB群と比較した。

2. 心理テストの得点と反応時間を指標した詐病の検出の可能性について検討した。質問紙法の心理テストの1つである、MMPI短縮版(MINI)をコンピュータにより自動化し、心理テストとしての得点に加えて被験者の反応速度を測定できるようにしたものを用いた。対象は26人の正常被験者に、2回の検査を施行した。第1回目は教示により意図的詐病を行わせ、第2回目は意図的詐病を指示せずに行った。それぞれのデータをM群、N群とした。また、26人の精神分裂病患者に対して意図的詐病を指示せず検査を行ったデータをS群として、この3群間で得点と反応時間の比較を行った。

3. 11例の精神鑑定例について、上記1, 2の方法を用いて供述分析と心理テストによる被鑑定人の詐病の可能性を検討した。

(結果)

1. A群(虚偽なし)とB群(虚偽あり)の比較では、B群においては、次の項目に抵触する発話の特徴が見られた。(括弧内はそれぞれの基準が該当するGriceの基準)

- a: 拒絶(量)
- b: 質問者への抗議・からかい(様態)
- c: 話題を抽象化する(関連)
- d: 過剰な明細化(様態)
- e: 訂正・言い直し(様態)
- f: 不快な反応(様態)
- g: 後悔の念を示す(様態)
- h: 推論を述べる・不明確(様態)

これにより、虚偽や詐病が疑われる被鑑定人の具体的な供述の特徴が明らかになり、供述が①事実と異なる、②内容が変遷する、の2項目に抵触するか否かについて判別することが可能であった。

2. MMPI短縮版(MINI)による心理テストに表れた被鑑定人の詐病の可能性をとらえる方法としては以下の指標が有効である可能性が示唆された。

1) 得点においては、従来研究で有効とされたF-K IndexがMMPI短縮版であるMINIにおいても有効である可能性が示唆された。

2) 反応時間においては、第50項目までの各項目の反応時間の平均値±標準偏差の範囲を逸脱する項目数が指標として有効である可能性が示唆された。

3. 11例の精神鑑定例に供述分析と心理テストの反応時間を併用することにより、より詐病を見落とす可能性を低くすることができることが示唆された。

(考察)

本研究は詐病という供述態度の歪みをMMPI短縮版の反応時間を用いて発見しようという、これまでになされたことのない試みであり、それ自体は基礎的・予備的な研究である。しかしながら、反応時間を用いて詐病と真の分裂病を弁別することが可能であるという発見は、反応時間を用いて被鑑定人の詐病を検出する可能性を提起し、施行の結果得られた心理テストの得点を併せて判断することにより、有効な指標となる可能性が示唆された。

さらに、実際の鑑定事例について、心理テストによる方法と供述分析の方法と合わせて用いることにより、より客観的に被鑑定人の詐病と供述の信頼性を評価することができると考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文で著者は、被鑑定人の供述の特徴から詐病の有無を推測できる可能性があることを示した。また、詐病のモデルにおいて、従来行われていた心理テストの得点評価だけでなく、反応時間の測定を加えることが詐病の検出に有効であることを明らかにした。さらに、供述の特徴と心理テストの反応時間を用いた詐病の検出方法が実際の精神鑑定例においても有効であることを示した。

本論文は、モデルを用いて詐病と心理テストの反応時間の関係を検討するなど独創的であり、これまで熟練した鑑定人の判断に委ねられていた詐病の判定について、客観的指標を導入することが可能であることが示されたことの意義は大きく、質の高い医学研究論文である。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。